

三姉のアメリカ見聞録
ミコさんの自然界の教え

ミコさんと私のご縁ができたのはちょうど12年前、2005年。この本は、それまでに私に起きた①アメリカでの体験談（見聞録）②ミコさんとの関係、そして③ミコさんから学んだ『自然界の教え』の概要の3つをまとめたものです。実在の人物をモデルにしている為に、様々な理由から個人のプライバシーは極力載せないよう配慮して書かれております。

10年以上前に一度、周りからの強い依頼もあり、ミコさんご自身で本を出版しようとしたことがありました。私もそれを手伝う形で、何度か取材させていただきました。しかし彼女は、それに反対する“お父様との約束”があり、その際にこの教えを世に出すことは諦めました。

「家族に迷惑が掛かってはいけない。10を出すのに1+9も、2+8も、3+7も10である。受け取る人の心次第であるから、あなたの言うことが全てではない」とのことでした。

しかしその後も「ミコさん、本書かないのですか？ 本出してください」と何度も多くの方から強い依頼を受け、この度「ミコさんの生きた証」を後世に残す為に本書は出版の運びとなりました。

物心ついた時から“人に見えないものが見え”、その力と共に神主だったお祖父さまから口伝で引き継がれ、育てられた自然界の教え。それはとても奥深く、本編ではその全てを書き尽くせませんが、若い方にもわかりやすいように物語形式にしました。大まかな教えと流れを本編の後半で当てはめていく形になっています。

そして続編では、『ミコさんの自然界の教え』に、よりフォーカスした内容で、更に理解しやすいよう、事例と共に細かな教えを盛り込む予定でおります。ここまで来るのにちょうど1年かかりました。完結までに今暫く時間がかかりますことをご了承下さい。

天鶴

ねえ
ノラ姐のアメリカ見聞録
ミコさんの『自然界の教え』

目次	3
まえがき	4
主な登場人物紹介	5
プロローグ	6
始まりは突然に	9
アメリカ人との国際結婚	39
現地妻と駐妻	59
美容師の道	77
ミコさんとの出会い	110
亡くなる直前の後悔トップテン	140
自然界の教え（ミコさんの言葉より）	151
天中殺と天黄札	155
自然界の教え（要約）	160
六巡の時に起きること	167
有名人で見る『自然界の教え』	173
幽霊とご先祖様	182
放せばみつる	187
ミコさんからのメッセージ	202
エピローグ	204
あとがき	206
運命数早見表	210

まえがき

20世紀まで、一部を除いて今ほど外国人が日本にいなかった頃、外国人を見慣れない我々にとっては、彼らは特別な人達だった。今やその状況は大きく変わった。変わらないのは、その外国人に出会う日本人にとって、彼らは“出身国の代表”であるという事。同様に、我々が海外にいる時には、我々がその“外国人”となり、世界の人に“日本人の代表”として見られる。その代表度は、その街での日本人密度により大きく変わる。前半の話は、アメリカという大国の小さな街で、唯一の日本人美容師として働いてきた筆者のアメリカ見聞録である。

インターネットのおかげで世界の壁は日に日に低くなり、世界共通言語の英語が日本でも当たり前に使われるようになってきた。しかし、現代日本は世界トップクラスの経済的豊かさを誇りながらも、幸福度は発展途上国よりもさらに低いという現実。自殺者数は表に出ているだけでも過去14年、年間3万人を超えている。遺書がなければ自殺と認められずに“変死”という形で処理され、数値に反映されないという。一説には日本には年間15万人ほどの変死者がいて、WHOではその半分を自殺者としてカウント、公表すべき自殺者数は本当は11万人という。これは実に他の先進諸国の10倍。

幸せはお金や物質だけで得られるものではないという事実に、我々は多くの犠牲を払ってやっと気づいた。近い将来、人工知能AIによって様々な職が必要なくなる。そんな時代に人間の持つ一番の強みは、知能指数IQ (INTELLIGENCE QUOTIENT)ではなく、心の豊かさEQ (EMOTIONAL QUOTIENT)かもしれない。

これから先、本書が海外に興味のある人、今生き辛い人、家族を守りたい人、特に母親に、何かしらのヒントや勇気を与えるものとなれば幸いである。登場人物像、名前、場所、時期、出来事に関しては、プライバシー保護のためにBASED ON TRUE STORYではなく、筆者の実際の体験をもとに複数の人の話を足したり引いたりしながら作ったINSPIRED BY TRUE STORYのフィクションである。

また、アメリカに住んだことのある日本人、もしくは日本に住む外国人により共感してもらえるよう、話し方はよりリアルに表現している。日本語にはない表現などを含め、英語の言い回しをそのまま使った為に、読みにくい所も多々ある。これは日本語は操れるが、“変な”そして“非常識な日本人”によって書かれた物語である。

主な登場人物紹介

【ノラ】

人生の荒波に流されまいと必死で生きてきた25歳。見えない糸で導かれるように、アメリカにホームステイに行く。そこで待ち受けていた数々のドラマの後に、ミコさんの助言に救われる。

【ミコ】（後半より登場）

幼少の頃より“未来が見える力”を持つサイキック。神主だったお祖父様より口伝で学んだ『自然界の教え』を元に、縁の下の力持ちとして政治家やセレブリティを始め世界中に顧客を持つ。ノラとは前世からの縁。

【デイブ】

ノラの結婚相手。アメリカ人弁護士。質素節約家。

【デイブ・シニア（パパ）】

ノラのホストファミリー。デイブの父。アメリカ好景気の時代にオイル事業で成功し40代にリタイア。悠々自適の生活を送っている。

【デイブ・ママ】

ノラのホストファミリー。デイブの母。料理の達人でなんでもキッチンで再現してしまう腕を持つ。四人の子を持ち、愛情深く涙もろい。

【姉】

ノラの年の離れた実姉。大学の教員。テニスが得意。

【F教授】

姉の先輩教員。ゼミの生徒を毎年アメリカにホームステイに連れて行く。

【キミー】

ノラの右腕美容師。三人の子持ち。夫の事情により、常に収入が不安定。ダイヤモンドサロンのオープン・スタッフ。

プロローグ

2016年 夏

「わたしね、このオリンピックの頃にはもうこの世にいないと思うの・・・」

ミコさんは、テレビを見ながら不意に呟いた。そこには東京オリンピックに向けて世間がにわかに動き出している様子が映っていた。

「!!!??? えっ? 自分でわかるのですか? 前に自分のことはわからないとおっしゃっていませんでしたっけ?」

「うん、なんとなくわかるの。人のことは“見えても”、あまり自分のことはわからないことが多いのだけどね・・・」

そう言いながらも平然としている彼女を見て、私は心臓の鼓動がドキドキと早くなるのを感じた。

人間はいつか必ず死ぬ。100%死ぬ。私もあなたも、そして大切なあの人も。

死んだように生きている人もいれば、人の為に世の中が少しでも良くなるようにと、一生懸命生きている人を何人も見てきた。ミコさんはその内の一人。信念を持って、明るさと優しさとリスペクトを常に忘れずにクライアントに接してきた彼女。ただ他の人と少し違うのは、人の未来が見える、いわゆるサイキックであるということ。

誰にでも幾度となく人生の分岐点がある。二つ三つ、もしくはそれ以上の選択肢の中から「どれがベストな道なのか」迷う時が出てくるもの。無限にして混沌とした世界の中から、自分が進んでいく道を選ぶ際に手伝ってくれる人、それがミコさん。

相手がホームレスであろうと、有名人であろうと、一国の代表であろうと関係なく、一人一人と真剣に、そして平等に誠心誠意尽くして生きた人である。テレビ番組からのオファーも断りながら、自身が子供の頃より、その生涯をご縁のある人たちの為に、正に縁の下の力持ちとなって、その人達の幸せな人生を陰ながら支え続けたのである。

私自身、周りに相談できる人も無く、一人悩み苦しんで、辛い決断をしなければならなかった頃に彼女と出会った。そして、これから起るであろう未来の選択肢を教えてもらいながら、それまでの人生から比べると、今まさに“幸せな人生”を手に入れた一人である。

世の中には自分の意思・信念を持ってその人生を生き抜く人は、全人口の3%しかいないと聞いたことがある。彼女はまさにそれに当てはまると感じていた。そして出会いから12年経つ今の私にとって、ミコさんは大切な家族のような存在だ。

でも、いくら深いご縁があったからといって、サイキックでもなく、占い師になるつもりもない私が、彼女の教えを書くことに一抹の不安もあった。しかし、日本人だけでなく、世界中に1万人を超える“迷える子羊”を救ってきた彼女とその子羊達の為に、また未来の日本の子供達のために“彼女の生きた証を残したい”その思いが私の心に再び火をつけた。

魂の炎が燃え尽きるまで生き抜いた人の死に際は見事である。「いつか自分も一廉ひとかどの人になりたい、なれるのだろうか」そんな葛藤を抱えながら私は生きている。大事なことは、止まらないこと。人生には体を休める事が必要な時もある。しかし己の思考を停止し、判断を誰かに委ねることほど危険なことはない。また考えすぎて実行できないでいると、貴重な人生の時間はあっという間に過ぎてしまう。だからこそ、恐れずに踏み出したその一步は、全て無駄にならないはずである。

2005年、アップル・コンピューター創立者のスティーブ・ジョブズ氏の母校の卒業式での有名なスピーチが今も心深く残る。

「今日が人生最後だとしたら、今日やることは本当にやりたいことだろうか」

「自分の心や直感に従う勇気を持って」

「“すべてうまくいく”と信じることにする」

「Stay hungry, Stay foolish. ハングリーであれ。愚か者であれ」

そして、死に直面した彼からの後輩への“魂の教え”には人生の縮図が語られている。

「先を見て“点を繋げる”ことはできない。できるのは、過去を振り返って“点を繋げる”ことだけ。だから将来、その点が繋がることを信じなくてはならない。信念、運命、人生、カルマ、何でもいいから信じること。点が繋がって道となると信じることで、心に確信が持てるのである。たとえ人と違う道を歩むことになっても、信じることですべてのことは間違いなく変わるのだ」

このメッセージは、私にとっても自分の新たな人生の一步を踏み出す上で大きな布石となった。そしてこのスピーチの4ヶ月後、10月に出会ったミコさんのアドバイスは、私に勇気を与えて背中を押してくれた。

「この世に偶然はない。あるのは必然だけ」

始まりは突然に

わたしの名前はノラ。
野良猫のノラじゃないよ。まあ、当たらずも遠からずってところあるけどね。まずは、私がアメリカに暮らすことに至った経緯からお話しするね。まだ日本人らしく、日本の一般常識の中で生活していた頃のお話。

そこからミコさんと出会うまでに約8年かかっているから少し長いけど、このお話がのちにミコさんの教えを説明するのにちゃんと繋がっていくからよろしくね。

*

1997年 秋

日本はバブルがはじけて不況だ不況だと言われていた。それでもバブリーな生き方、考え方をする人達がまだまだ世間の大半を占めていた。誰もが戦後の経済成長によってできた社会の歪みを感じながらも、まだまだはつきりと認識されていない時代。

私は本社が池袋にある会社に勤めていた。そしてその会社から派遣で新宿都庁に送られ、そこで公務員の方々と共に情報処理のお仕事をしていたの。25歳になっていた。その頃、世間ではクリスマスケーキといわれる年頃で、この歳を過ぎると未婚女子としての付加価値が一気に下がるってなにかの雑誌に書いてあったわ。2年間付き合っていた彼がいて、結婚話も自然と出ていた頃。

そんな時、年の離れた姉が教えている大学で毎年行われるホームステイ・プログラムに、「付き添いとして参加しないか」と誘われたの。「見聞を広めるのにとっても良いから」という理由で。その学校には何度か社会人の先輩として、彼と共に学生にスピーチをしに行ったこともあった。だから馴染みもあったし、その時

の仕事を生半く続ける気もなかったの、辞めて引き受けることにしたわ。そして、その学生達からは自然にノラ先輩、ノラ姐って呼ばれていたの。

ホームステイに付き添いとして参加を決めたものの、私は英語が全くできなかった。学校の授業でも一貫して英語は大の苦手。それまで洋楽とか外国にも、全くといって良い程興味はなかった。

でもホームステイに誘われる少し前、父を亡くしたこともあり、日本とは違う、「外の世界を見てみてもいいかな」と思った。今思えば、なんらかの変化を求めていたのかもしれない。けどまさかまさかそこに、アメリカ人と結婚する未来が待っているとは家族や友達もおろか、本人でさえも知らなかったわ。しかしその出会いは突然に、そして必然的にやってきて、そのままお嫁入りが決まってしまったの。はじめはそのお話からね。

*

アメリカ東海岸、ニューヨーク州郊外はとても自然が豊かな所。木々や、森は世界中みんな同じように見えるけど、アメリカはなんていうのかな、道路とか街並みがすごく綺麗に作られているように感じたわ。ヨーロッパは歴史の宝庫だから、日本と同じく新旧が混在するようなところもあるけど、アメリカはまだ400年ちょっとの歴史だからか、街並みが比較的新しく、人工的に計画的に作られているのね。特に大都会でない郊外は。

私がステイした家はリタイアした夫婦の素敵なお家。初めてホストファミリーのパパとママと会ったのは、連日英語の勉強に通った大学のキャンパスの駐車場。私達はマンハッタンの観光を前日までに終え、その朝にバスで数時間移動。駐車場に入るとたくさん外国人、アメリカ人がいた。主に白人だったけど、アジア人の自分と同年代位の人もいた。その頃は白人はみんな同じ顔に見

えちゃって。髪がブロンドもブラウンも、瞳が青も緑もヘーゼルもみんな同じに見えた。黒人も一緒、みんな黒くて、唇あつくて、手の平と歯が白い。

こんなこと本人たちに言ったら怒られちゃうけど、本当よ。外国人を見慣れていない人は、初めはみんなそうよね。彼らも日本人の若い子が皆同じに見えるって聞いたことあるもの。流行りの同じ髪型、同じ化粧、同じようなファッションで。

だから、目が慣れ、それぞれ違う人だと判別できるようになるのに随分時間がかかったわ。それまでドイツ、フランス、アジア諸国などへの海外旅行は何度か行っていたけど、全くの別世界だったから、自分の世界というか、生活の一部として取り込むことができていなかったのね。

でも不思議と黒髪のアジア人がいると、なぜか自然と目がいくの。そして、相手を値踏みするかのようにジロジロ見ては、なに人かしら？ って無意識に推測している。ライバル意識みたいなものかしら。

後で知ったけど、彼女は中国からアダプト（養子縁組）されてきた中国系アメリカ人なんだって。でも、アメリカでアメリカ人の親元で育っているから、知識、情報はほぼアメリカもの。ということは、外見的には中国人、でも頭の中身も人格もアメリカ人ということ。

中国語を話せない彼女は、髪が腰まである笑顔の素敵なお医者様だったの。チャイニーズ・アメリカンていうのね。こういう人、主に親やDNAがアジア系だけど、アメリカで生まれ育って、中身が白人的な人のことをバナナっていうんだって。外が黄色で中が白。外が黒くて中は白い人はオレオっていうみたい、面白いよね。

日本にもたくさんの方の国に在日がいるけど、アメリカで暮らしてわかったことは、祖国よりも母国。育った環境、得てきた情報が日本のものなら、見かけが白でも、黒でも、赤でも、黄でもみんなおんなじ日本人よ。特に二世以上はなおさら。それは外国に行くとき実感するの。親の母国は祖国、生まれがどこであろうと肌で感じ、見て、聞いて、食べて育った国がその人の本当の母国。

アメリカ人のほとんどは国がミックスしてて、複数の祖国というバックグラウンドを持っていることが当たり前。だから、育ったところがその人の地元になり、そこが母国。

実際に祖国に行くと“自分はここの人間ではない”って自覚するみたい。当たり前と言えれば当たり前よね。親から聞かされた彼らの時代とは変わり、自分はその実際の生活のほとんどを知らないのだから。自己紹介で、父方の祖国は〇〇とXX、母方の祖国は■ ■と△△だけど、自分は〇〇州生まれ~~XX~~州育ちで、大学は▲ ▲とい言うのを当たり前のように聞く。

そして皆アメリカ人としての誇りと愛国心、忠誠心を強く持っている人が多いわ。日本人であんなに愛国心持つことを普通としている人達を見た事なかったから、ちょっと驚いた。と同時に羨ましくもなったわ。

祖国はご先祖様の国。自国（母国）は自分の記憶、故郷、家族、友達。祖国、自国どちらにも誇りを持って胸を張って彼らは生きている。そして、国旗に向かって国歌斉唱を堂々とする人はみなCOOLで格好いい。

でも、その頃の私は井の中の蛙な日本人。まだまだ見た目て人を判断することが多かったから、そういうバックグラウンドがどうとかがよく分からなかったの。まあ、姉の言う“見聞を広

める”っていう意味では、このプログラム、そしてアメリカ生活は人間磨きに最高に役に立ったわ。だから日本にいる人にも海外に出る機会があったら、100%「GO！」ってお勧めするわ。

頼る人もいない、いたとしても少ないから、結局は自分で知恵を絞り、自分ではそれまで使ったことのない部分の脳を使い、無から有を作り出す経験をたくさんするわ。可愛い子には旅をさせろって昔から言うでしょ。その子の未来を信じ可能性を引き出してあげたいと思うのなら、又本人が望むのなら迷わず「GO！」

絶対大変な思いするけど、積極的に生きると覚悟して、どんなことも前向きな言葉と感謝、笑顔で受け入れていけばいい。その分、いいえ、それ以上に楽しいこと、エキサイティングなこと、生涯忘れられない経験（大きな点）が数え切れないほどできるわ。

結局はどこに住んでいてもそうだけど、どんなことが起きても自己研鑽のためと意識し、感謝を忘れないでいると必ずいいことがある。思い込みや偏見を持たないこと、素直に考えすぎずに受け入れるってとても大事ね。そしてできればいつか、それらの経験を活かして、育ててくれた親や周りの人、地域社会、そして母国に返すの。自分が人と繋がることで架け橋になることもできる。

世界中から人が集まって構成されているアメリカに住むということは、世界中に人脈を広げることにも繋がるのよ。しかも日本にいるよりもずっと簡単に、心底幸せな人、有名人、大金持ちとも仲良くなれる。アメリカ人だけでなく、ユダヤ人、華僑、印僑、中近東、東南アジア人でも来ている人は基本お金持ちが多い。そうでない人も積極的に生きて成功している人が沢山いる。

日本の一般常識なんか全く通用しない環境で、日本の常識は世界の非常識みたいな経験もたくさんするわよ。そして、世界中の人たちと英語という共通言語で、共通体験をするでしょ。それは言

語や文化を超えた同じ人間としての絆が生まれるのね。

それはある意味、子育て、農作業、ビジネスと似ているかもしれない。妊娠と出産と子育て、土作りと種まきと水やりなど収穫までの世話は、どれを取っても経験した人にしかわからない、言い尽くせない細かいことが沢山あるよね。でもそのプロセスは世界共通。大変な事があってもそれを超える喜びや楽しみがあるの。

だから、帰国する頃には、一回りも二回りも大きくなれるわよ。あ、体の話じゃないよ、人としての器の話。まあ、体といえば、私はこの20年で五回りくらい大きくなっちゃったけど。😏

ホームステイのこの時点ではまだ一回り❤️

だってさ、アメリカの食事って言わずとした不健康で太りやすいものが多いでしょ〜。しかも、ステイ先のママは料理がめちゃめちゃ上手で全てが美味しいの！ ホームステイ先の中で一番の料理上手で、ラッキーだったわ。中には夕食がじゃがいも一個、テーブルの上にレンジでチンしてたべて❤️とか、毎日シリアルや缶詰なんて子達もいた。これが冗談じゃないんだから。😓

でもそれはそれでわたしには別の問題もあった。ママもパパも残ったものは、次の日にはもう食べないからってみんな捨てちゃうのよ！ それを見て「もったいない」と思った私は無理して食べられるだけ食べちゃう。食べ物への感謝の心を厳しく教えられた環境で育ったから、食べられる物を捨てちゃうなんて「ありえない！」の一言。おかげで、帰国する度に身も心も丸くなりまして、はい。😁

まず、プログラムの最初にマンハッタンに観光に行った時には、人やゴミの多さ、タクシーのマナーの悪さに辟易した。けど、セ

ントラルパークに行ったらリスや馬がいるじゃない。池では魚釣りなんかもしてたりして、大都会で釣りしているのを見て驚いたわ。リスは結構人馴れしていて、学生達はみんな写真を撮り餌をあげようとしてたわ。その後ホームステイ先でも、リスがあちらこちらにいるのよ、どこの家の庭にも木にも！ たったそれだけの事でみんなの気分が上がった。すぐに自然の虜になった。

F教授っていう心理学の先生がいるのだけど、その先生がまた変わった先生でね。その後、別の大学の学長にまでなるんだけど、当時から掴み所がないっていうか、何考えているかわからない先生。でも、生徒からは信頼されていて、時には下ネタ含めながらいつも楽しい話を教えてくれたのよ。そしてホームステイする街に向かうバスの中で、こんな話をしてくれたの。

「おい、お前たち、日本人の名前は現地の人には呼びにくいものもあるから、この機会にアメリカン・ネーム作ってもいいぞ。日本人には言えても、鶴（ツル）とかは彼らには絶対発音できないからな、先生の今住んでいる“鶴ヶ島市”なんて必ず聞き直される。車のマツダのツもTSUと言えないからスペルがZなんだぞ」

「へー、そうなんだ～、なるほど～～」と皆が感心する。

「あとフとか、ヌマタのヌとかも言いにくいから。フクやフキコは少し変えてもいいかもな。FUKと続くとスラングのファ○クって悪い言葉を連想されるからな」

誰かが爆笑している。キョトンとして意味がわかってない者も。

「マイコは変えてもいいかもな。マイコっていうとアメリカでは男の名前、マイケルの発音そのままだから。同じスペルでも女性の場合はミッシェルと呼ばせるからな。じゃあ、お前はミッシェルだ」

マイコは顔を赤らめ、手を口に当てて喜んでた。

「先生、私は？ 私は？」

皆が一斉に聞き出した。そしてこのプログラムの学生リーダーで海外旅行経験者だったミカが

「じゃあ、先生、私たち英名とかよくわからないので、先生がみんなの名前つけてください」皆が賛同した。

「よし、わかった。はいはい、ミカはミだからミーシャはどうだ」

「えー、かわいい〜！」

「次、私は？」エリコが言う。

ミーシャが答える。

「あーあのね、うちのママの妹、エリコおばさんは外資系の会社に勤めているの。で、電話でよくエリックに間違えられるんだって。メールでも話したことのない人はMr.ERIKOと勘違いされたり、イタリアに旅行行った時には「エンリコ」と言われたって聞いていたなあ。これもやっぱり男の名前なんだってよ。だから、外国人に使うのはエリーにしているって。あなたもエリーはどう？」

「そうだな、先生も賛成だ。ノリコ、お前の名前はアメリカ人にはよく音がかわいいって聞くが、スペイン語では美味しいというのをRICOというから、NO-RICOで意味的には“美味しくない”ってなるな😊」

「えーなにそれ、なんか嫌〜！ 先生、私にも何か考えてください」

「じゃあ、ニコールとかノーマとかはどうだ？ マリリン・モン

ローの本名だぞ」

「ふーん、他には、他には？ ノアとかってのはどうですか？」

「うーん、ノアは一般的には男の名前だがノエルはどちらにも使えるな。ニーナ、ノーリンと言うのもちょっと古いけどあるな」

「先生、私は？」ヒトミが尋ねる。

「あー、お前のは最高だぞ。そのままいうと英語の発音でHIT ME『殴ってくれ』って意味だから、すぐに覚えてもらえる」😂

皆が爆笑した。

「すごい嫌なんですけど！」顔を赤らめて嫌がるヒトミ。

「アメリカっていっても人種のもつぽでヒスパニック系も多いから、Hを読まずにHITOMIがイトミと呼ばれることもあるんだぞ。過去にそう呼ばれていた子もいたな。ヒをそのまま使いたいならヒラリーとかヒルダとかヒンギスとかかな。Hだけ残してヘレンとかホリーとかはどうだ？ ヘレンケラーのヘレンだぞ。ジュンコもスペイン語ではJの発音もジャでなくハになるから、フンコさんになるんだぞ」

「えー、おもしろーい。先生スペイン語も知ってるんだ〜。やるじゃん！」

「まあ、毎年このプログラムやっているからな」

「ヒロはそのままいいな。HEROだから」

「初めて自分の名前が好きになった！ 外国ではすごくいい名前なんですね」満面の笑顔のヒロ。

「ヒット・ミーよりずっといいよね。少なくとも殴られないじゃん」爆笑が湧き起こる。

「そうだよ、レストランで名前呼ばれるたびに、“美味しくない”ってのだからナンカやだよ・・・」とノリコ。

「マリコはそのまま使えるな。マリーやマリアがポピュラーだぞ」

「いえ、私はマリコのままがいいです。変ではないですよ？他にも変な名前ってあるんですか？」

「そうだな、変というか男の名前でそのまま言ってまずいのはユウダイ=YOU DIE、お前は死ぬ、これはまずいよな」😅爆笑。

「愛だってマイネームイズアイ (I)、マイはマイネームイズマイ=私の名前はわたしですってなっちゃうし。同じようなのでユウなんかも、マイネームイズユー=私の名前はあなたです、ってこれちょっと変だよな。前にいた生徒でもサエコって名前がそのまま発音するとPSYCHOサイコに聞こえる。これは直訳すると精神病患者だ。でも本人は開き直って、サエコ最高=ベストだと説明してそのまま使っていたけどな」😁

「あとは・・・あ、そうだ、ユウサクなんかもYOU SUCKS=馬鹿野郎！ワコもWACKOっていうと奇人変人変わった人って意味だし。あと、アキ、マキ、ミカお前の名前もそのまま言うとなりの名前だと連想されるぞ。タカシだってフランス語のT'as qu'à chier！とよく似た発音で意味は“お前のクソ”だからなあ。

でもつけている親たちは、世界に出ても恥ずかしくない名前なんて意識しないで、日本の感覚だけでつけているからな。こればかりは仕方ない。中国人の名前だってチンさんというのを日本人は変に連想する人もいるだろ。それと同じだな。所変わればだ」

「へえ～、知らなかった～」皆が口をそろえる。

「それを言い出したら世界に出している日本車の名前もすごいぞ。三菱のPAJEROパジェロだってスペイン語では“自慰をする人”を連想させるから、スペイン語圏ではモンテロ、ヨーロッパではSHOGUNに変更して販売されている。イスズのBIG HORNビッグホーンもHORNは男性性器を想像させる。性的に興奮という意味のHORNYもこの言葉が語源だからやっぱやばいだろ。ダイハツのネイキッドだって、裸って意味だから外国人はみんな変な顔してるぞ、日本人の頭の中はどうなっているの？って」

「えー、マジでー?!」

「やだー。きゃははは」

「ヤダ、信じらんない～！」顔を赤くする生徒もいれば「またか」という顔をする子もいた。

「まあとにかく、ここはアメリカだ。この国では姓名の他にミドルネームを持つことも当たり前だ。この機会にお前達も好きな名前考えてみる。海外に出て自分の名を簡単に覚えてもらおうと思ったら、英名の方が楽だし、いいセルフイメージにもなるぞ。韓国人や台湾人、香港人は当たり前持っている人も多いからな。

実際、市民権を取ってアメリカ人になる時には、好きな名前を本名として登録することもできる。今はまだ少ないが、そのうち日本でも普通に英名で呼び合う時代も来るかもな。先生の息子も自分でジョージって決めてるしな。最近はその名のイメージだけで、自分のセルフイメージを変えるために英名をつける人もいるくらいだしな。セミナーとかでもたまにあるぞ」

ノラという名前は、高校生の頃に友達の家族と観た北欧の近代

劇作家ヘンリック・イプセンの『人形の家』からだ。衝撃を受け、強く惹かれた主人公のノーラ。彼女のように強い女性になりたいと思った。その友達が「そのままで十分ノーラみたいだよ。そんなに好きなら、じゃあ今日からノラって呼ぶね」と言い出したことからそのあだ名は定着し、本人も気に入っていた。ある意味、F教授という名前で自分のセルフイメージを変えるということを自然にしていたのかもしれない。

私ね、幼少の頃からなぜか人より目立つ所があったの。空気を読むことがうまく、人一倍気が利く女の子とも言われていた。その為か思春期からはよくモテて、中学生の頃、先輩から自宅に電話がかかり、告白され返事に困っていると、母親が勝手にキッパリ断ったり、後輩からもたくさんラブレターをもらったりした。目立つ割に、少し気が弱いというか、嫌われたくなくて、なんて言っているのかわからずとにかくもっと強くなりたいと思っていたの。だからノラと呼ばれるのは嬉しかった。

都庁で仕事している頃にも、あまりよく知らない別の部署の人から、ある日突然花束をもらったり、上司からもよく食事に誘われることがあったわ。断ることが苦手でどちらかというと八方美人なのかもしれない。実はその頃、慶応大学院出で商社に勤めていた彼がいたの。でも彼の両親は、私の学歴やら家柄やら何やらが気に入らないようで、結婚には“少し”支障があると聞かされていた。「息子にはフェリスか白百合のお嬢さんを」と考えているって聞いたわ。何か納得いかないまま時間だけが過ぎていた。その矢先に尊敬する父親の死、そして運命のホームステイがあったの。

私の他にもう二人の学生のミカとフミが、その家にステイさせてもらったのだけど、着いたその日に地元のテレビ局が来て、取材された。当然、マイクは年長の私に向けられた。でも英語できないから彼女たちにふったの。彼女たちは私より英語できたのだ

けど、発音が悪いのか通じない。結局「歌を歌ってくれ」って。街にはクリスマスデコレーションが飾られ始めていたから『きよしこの夜』を大の大人3人でね。😄

それをテレビで見て、その晩はみんなで大ウケ！ その時にママが作ってくれたデザートが特大バナナスプレッド。それ専用の横に長い透明のお皿に縦半分に切ったバナナを並べて、大きなアイスクリームスクープでチョコ、バニラとイチゴのアイスを3つのせる。更にその上にスプレー缶タイプのホイップクリームをたっぷりかけてチョコレートシロップ、そしてチェリー。これ3人分でしょ〜と思いきやこれが一人分！ 思わず写真も撮った位。

エキサイティングなホームステイのスタート。
このホストファミリーのパパとママには四人の息子がいて、長男デイブは独身ですぐ近所に住んでいたの。弁護士でこのホームステイの現地でのコーディネーターも買って出て、ホストファミリー探しなど色々手伝ったと聞いたわ。私たちを迎えるために両親の家をリフォームし、みなが私達の来ることを本当に楽しみにしていたらしいわ。だからホームステイ期間中も仕事が終わると毎日両親の家に来ては、いつも時間を共に過ごしていたの。

毎晩アルバムを見せてもらって、彼らの思い出話FAMILY HISTORYを聞かせてもらった。東海岸ノースの小さな州の出身で、デイブ達は幼い頃からプール付きの邸宅で育ったいわゆるお坊ちゃん。ホームパーティーの時には豚や牛の丸焼き、プールに放したロブスターや魚を自分たちで取って焼いて食べるという、日本人からは想像もつかない豪快な家庭で育ったそうよ。

パパはそのエリアではオイル事業で成功した名士として知られている。20代の頃、兄弟3人で立ち上げた事業は大成功し、40代でリタイアしたんだって。そしてその利益の一部を地元に取り

め続けた功績が認められ、彼らの自宅前の道には一族の苗字が何箇所かで使われていたのよ。○○STREET, ○○AVENUE, ○○DRIVE等と。

面白い話とカードゲーム、そして宝くじが大好きでいつも近所の人とジョークを飛ばしては、大声で楽しそうに笑っていた。葉巻がよく似合うダンディな人だったのよ。彼らのジョークに私一人ついていけなくても笑ってごまかしたわ。その代わり、パパとはゲームでコミュニケーションを図るようにしたの。ポーカーとか色々教えてもらった。

時には私達が日本生まれのカードゲームで絵柄の綺麗な花札を教えたりね。初め、ポーカーフェイスの彼に我々は何度も負かされたわ。でも、段々と大きく賭けるコツも教えてもらい、帰国が近づく頃にはパパを負かす位成長したわ。その都度皆で大きな声を出して笑った。だってパパ負けず嫌いで、子供みたいに本気で悔しがるんだもの。それが可愛くも思えたわ。

ママはパパ、デイブ・シニアに18歳で見初められ結婚し、生涯一度も働いたことがない専業主婦。息子4人をこの上無いくらい愛情持って育て上げ、また後に肺がんで闘病生活を送る夫を40年以上献身的に支え続けた理想的な妻、母。二人の結婚式の時の写真はハリウッドスターと言われたら信じてしまう位、格好良く美しいものだった。いわゆる生涯LOVE BIRDS だったの。

蝶々が好きな彼女は、家中どの部屋にもトイレにも見事なフレームに入った蝶の標本アートを飾っていた。特に青い蝶がお気に入り、玄関入ってすぐにあるリビングルームには、縦1メートル弱、横1・2メートルほどの大きなクリアーボックスに飾られていた。青をメインとした蝶々たちが今まさに飛び立つ瞬間の姿で時間を止めている。その見事なまでに美しい作品は誰もが足を止め、

見入ってしまう程。その度にこれはどここの蝶、どこどこで手に入れたなどといつも熱心に説明してくれたっけ。旅行に行った先々で見つける度に買い求めては空輸して集め、今では全部屋に置いて余ってしまう程になってしまったのだった。

そんなセレブママの日常は、お得意の料理を朝から晩まで作ること。彼女の舌は料理人の舌といっても良いくらい優れていた。そして一度食べたものを、自宅で見事に再現してしまう腕前を持っていた。彼らが若い頃、その近所にあるレストランの数はまだまだ少なく、外食に行く家庭も稀であったらしい。しかし美味しいと聞けば家族で1、2時間以上かけて食べに行くこともままあったようで、気に入った料理があれば、レシピを聞きだし、自宅キッチンで再現する。レストランの味そのままなのに子供たちも驚いたとか。

1 (ONE) STICK BUTTER EVERY DAYこれをママは使う。アメリカのバターは四角い箱に棒状で1本113.4g×4本のバターが入っているのだけど、毎日最低1本は料理に使っていた典型的なBUTTER LOVER。彼女の作るパンケーキは溶かしたバターに浮くという位。またバターがたっぷり使われたデザートもその美味しさといったら！

パティシエとしてデビューしても通用するであろう程のその腕前で、デザートまでも日替わりで作る。ノラにとっては毎日がグルメ三昧だった。お気に入りにはパイナップル・チーズケーキ。チーズとパイナップルとバター風味のスポンジの絶妙な口当たりが忘れられない。

ホールケーキの三重になったスポンジの間には、パイナップルの果肉と数種のクリームチーズのミックスされたものがたっぷり塗られている。その周りにはホイップクリームとチーズクリー

ムのミックスクリームが満遍なく塗られ、それを余す所なくスプーンの裏側で角立てていく。最後に細かくクラッシュしたパイナップルと、庭から採ってきたミントの葉を彩りよくのせる。

テーブルの中心奥に置かれた大きな陶器でできたイギリス製の金のケーキスタンドと、金のトリムのガラスカバーの中で出番を待つその姿は、動かずともデザート女王のような風格さえある。

甘いものに好きでなかった私も、これまで人生で味わってきたケーキの中で最高の美味しさと驚いたほど。一口で夢中になった。ママのディナーは、これらの美味しいデザートで最高潮に盛り上がるといっても過言ではないわ。

そんな彼らを含め、ホストファミリーは、ほとんどボランティア。最低限の食費しか受け取っていない。お世話になっているのに、付き添いのくせに英語もまともに話せない。そのかわりに率先して料理、食器の片付けや掃除など手伝ったわよ。良くも悪くも行動力は人一倍あったからね。その為か両親にもデイズにもすぐ気に入られた。

それらの日々の生活で、言葉が通じなくてもボディー・ランゲージや、同じ体験を通じて分かり合えることがあると身をもって知ったわ。そのうちホームステイが終わりに近づくと、ママから個人的なことを色々聞かれるようになった。日本の家族のこと、今後のこと、この街、自分達をどう思うかなど。いつものように辞書を片手に絵に描いたり、単語だけで会話してお互いに言いたいことを推測し合うコミュニケーション。信頼関係が根底に出来上がっていたので、どうにか理解しあえた。

そしてそのホームステイも終盤に差し掛かったある朝、姉と私は、デイズの家に来るよう呼ばれたの。真っ白な雪景色の朝。迎えに来てくれた姉と二人で「なんだろうね？」なんて話しながら。

彼の家まで歩いて行くと、本人がMAN CAVE(DEN)と呼ぶ、地下のシアタールームに通された。大きなリクライニング・ソファに腰掛けていた彼は、初めはうつむいていた視線の先を、まっすぐ姉に向けたかと思うと、ゆっくりと真剣に話しはじめた。

私は何の話をしているのかさっぱりわからず、ただそこに立ち尽くしていた。するとまさかのプロポーズ。しかも、姉の通訳で！